

漢字音の連濁

Rendaku on Vocabulary of Chinese origin in Japanese

経営学部現代経営学科

呂 建輝

LU, Jianhui

Department of Contemporary Business

Faculty of Business Administration

要旨：本稿では、これまでの漢字音の連濁研究を概観しながら、漢字音の連濁にみられる法則性を考察した。漢字音の連濁は、古く鼻音の前接、前接字の声調といった音環境面の影響を受けていた。一方、和語の前接により連濁する漢字音も見られる。連濁は基本的に和語に起こり、漢語に起こらないとされている。しかし語構成上、漢語複合語に典型的な「語の並置」という語構成でなければ、漢語でも和語のように連濁が起こる。また、「類推」により濁音形のまま接尾辞性字音形態素となった語彙もあるが、音韻上の「連濁」からかけ離れているといえる。

Abstract : In this paper, we introduce researches about Rendaku on vocabulary of Chinese origin in Japanese, and consider in which kinds of conditions Rendaku occurs. In ancient times, Rendaku is used to be related to phonetic environments, such as nasal consonant and accent. On the other hand, Rendaku also occurs when a word of Chinese origin following a word of Japanese origin. It is considered that Rendaku is especially related to the vocabulary of Japanese origin, but not vocabulary of Chinese origin. However, when a compound word of Chinese origin is not composited by juxtaposition (the typical composition of words of Chinese origin), it will be treated as a word of Japanese origin and appear in Rendaku form. Furthermore, Rendaku form can transform itself into a suffixal morpheme by analogical extension. In this case, Rendaku will be upgraded to a lexical problem, but no more a phonetic phenomenon.

キーワード：連濁, 語種, 語構成, 語の並置, 接尾辞性字音形態素

Keywords : Rendaku, roots of vocabulary, word-composition, juxtaposition, suffixal morpheme of ancien Chinese origin

I. 漢字音の連濁

連濁とは、二つの形態素が結合する際、後部要素頭部の清音が濁音化する現象である。

〈1〉 くさ_[草] + はな_[花] → くさばな_[草花]

一般的に、連濁には語種の違いがみられる。和語には連濁が起こりやすく、漢語・外来語には連濁が起こりにくいとされている。上掲〈1〉もまさに連濁が和語「はな」に起こったものである。しかし、少数ではあるが連濁が起こった漢語・外来語が存在する。外来語の連濁については、中川(1966)が指摘するように、江戸時代以前に日本に入ってきて和語化の度合

いが高いものに限り、連濁が生じている(歌ガルト、くわえギセル、赤ゲット)。一方、漢語の場合は以下〈2〉〈3〉のように、連濁¹⁾が起こる現象が多く見られる。

〈2〉 いたく_[委託] + かいしゃ_[会社]
→ いたくが_[委託]いしゃ_[会社]

〈3〉 ろ_[廬] + さん_[山]
→ ろざ_[廬]ん_[山]

ただし、和語連濁の研究における「形態素」という概念は、必ずしも漢語連濁の研究に適用しないことが多い。〈2〉の場合は形態素「委託」と形態素「会社」

による結合と考えられるが、〈3〉の場合は前部要素「廬」が意味を持つ形態素と言えるかどうか疑問である。一般的には「廬山」全体が一語であると考えられる。とはいえ、後部要素「山」の漢字音はもともと清音「サン」であるため、「廬山」という語において濁音化が起きているのも明らかな事実である。こういった例の存在を念頭に置いて、本稿では、和語形態素と対立し、音読みで読まれる要素のことを「漢語」ではなく「漢字音」と呼ぶ。

では、漢字音の連濁とは如何なるものだろうか。本稿では、関連する先行研究を踏まえ、漢字音の連濁にみられる法則性および問題点を考え、さらに今後の展望をする。

II. 音環境：漢字音連濁の起源

漢字音の連濁に最も影響を与えるのは、鼻音の前接という音環境面の要因といえる。以下〈4〉のように、前部要素の尾部に鼻音「ん」があるとき、後続する清音が濁音になる傾向が見られている。

〈4〉ないりん-ざん [内輪山]
えん-ぜつ [演説]

この「鼻音の前接による連濁」は、奥村（1952）によると、古い時代の日本語においてさらに盛んに行われていたものである。以下〈5〉「歛」「本心」のように、現代において清音「かんき」「ほんしん」で読まれる語も、古くは濁音で読まれていた²⁾。

〈5〉歛 ※去 喜 ※平濁
大般若波羅蜜多經（東京大学国語研究室蔵本）三七折ウ・三八折オ
本 ※平 心 ※去濁 貞享版補忘記

ロドリゲスの『日本大文典』（1604～1608）によれば、当時日本人の間で「うむの下濁る」という言い方があり、「む」に続く清音が濁る現象が「鼻音の前接による連濁」にあたるということである。「う」に続く清音が濁る現象は、現代語では以下〈6〉のような例を指している。

〈6〉とう-ざい [東西]
しょう-ぶ [勝負]

「東西」「勝負」を濁って読むのは、「う」が前接し

ているからだと思われていたが、前接字「東」「勝」が古くng韻尾を有する字音であったことを考えると、少なくとも「東」「勝」の鼻音性がまだ失われていなかった時代においては、同じく鼻音の前接により連濁が起こったものと考えられる。後の時代には「東」「勝」の鼻音性が失われ長音へと変化した³⁾、その名残により、現代においても長音の前接による濁音例が散見されるのであろう³⁾。

では、なぜ鼻音が前接すると連濁が起こっていたのだろうか。高山（2012）は、中世語あたりまでの濁音が前鼻音を伴っていたと指摘し、当時の濁音化という現象は音声的に鼻音の前接が必要であった。現代においても東北一帯や南九州の一部の方言で、濁音・清音の対立を有聲・無声ではなく、前鼻音の有無で弁別しているのだが、中世までは中央語においても同様な状況であったということである。つまり音声上、鼻音の前接があれば清音が濁音になるという現象がかなり規則的にみられる時期があり、それが鼻音の前接による連濁の起源であると考えられるのである。このように、古く鼻音の前接により起こった連濁を、高山（2012）は一般的な「連濁」と区別するため「連声濁」と称している。

ただし、「鼻音の前接による連濁」はかなり規則性がみられる時期があったとはいえ、鼻音の前接があれば必ず連濁が起こったのではなく、「鼻音の前接による連濁」にはさらに別の制約がかかっていたと考えられている。その中で代表的なのは、字音の声調と連濁との関係である⁴⁾。奥村（1952）は、去声調の字音が前接する場合、連濁が起こりやすいとした⁵⁾。さらに、それが現代日本語におけるアクセントにも通じるものとし、以下〈7〉のように、高平調の「丈夫」「勘当」（アクセントの核が「ふ」「と」の前でない）には連濁が起こり、下降調の「丈夫」「関東」（アクセントの核が「ふ」「と」の前にある）には連濁が起こらない。

〈7〉じょうぶ [丈夫] じょうふ [丈夫]
かんどう [勘当] かんどう [関東]

確かに、アクセントと連濁との関係については和語の連濁研究でもよく議論されている⁶⁾。「人声（ひとごえ）」が連濁するのに対して「一声（ひとこえ）」が連濁しないということも、アクセントの型が違うという観点で考えることができる。一方、和語数詞「一（ひと）」に続く場合は連濁が阻止されるという別の観

点で考えることもできることから（中川1966）、アクセントの型が直接連濁を起こす要因になるかどうか疑問をもつ。むしろ、とある条件の下でアクセントの型が平板化すると同時に連濁も起こした、と考えることもできるのではない。

その一例として、窪蘭（2004）には語の長さ（モーラ数）がアクセントと連濁に影響をもたらすという指摘が挙げられる。音韻上、5モーラ以上の語は複合語として扱われ、複合語式アクセントとなり、連濁も起こりやすいということである。ただし、語の長さがアクセントと連濁に与える影響は必ず同程度のものではない。漢語の場合でいうと、例えば以下〈8〉に挙げる「後産」「比叡山」は、いずれもアクセントの核が「さ」の前にあるにもかかわらず、連濁が起きているのである。

〈8〉あと'ざん [後産]
ひえいざん [比叡山]

ただし、〈8〉の語例から言えることは、「後産」の「産」字に前接するのは和語要素である。「比叡山」も、その語源を辿れば、もともと「冷えの山」を意味したものであるという説があり（蜂矢2017）、和語前接の例とみなすことができる。ということは、和語が前接するとき、連濁が起こりやすいのだろうか。

Ⅲ. 語構成：和語と漢語の境界

呂（2014）、呂（2015）は以下〈9〉〈10〉の例を挙げ、和語要素が前接する「産」「勢」は和語化され、連濁が起こったとした。

〈9〉はや^{うるざん}初産して逆者いふより守刀産着をかさね
好色一代女
Nagarezan 流れ産 和英語林集成（初版）
跡産^{ざん}のもつれにて我妻はあへなき最期
弓勢智勇彦
裏店の鼻さん達が寄り合てしもざんとやら
のち産（ざん）とやらをとりあげ 傾城知恵鑑

〈10〉Cojei 小勢 日葡辞書
Tejei 手勢 日葡辞書
Yujei 弓勢 日葡辞書
Yunjei 弓勢 日葡辞書
Yojei 夜勢 日葡辞書

Vôjei 大勢 日葡辞書
Saqjei 先勢 日葡辞書
Fiqjei 引勢 日葡辞書
Suqejei 助勢 日葡辞書
Fuxejei 伏勢 日葡辞書
Mixejei 見勢 日葡辞書
Vosayejei 押さえ勢 日葡辞書
Cataraijei 語らい勢 日葡辞書

一方、以下〈11〉のように、呂（2021）で取り上げられた「本」は、和語要素が前接しても連濁が起こらなかった。

〈11〉Tefon 手本 日葡辞書
Vorifon 折本 日葡辞書
Surifon 摺本 日葡辞書

「産」「勢」と「本」が異なる連濁傾向を見せたのは、それぞれの語の表す意味にあると考えられる。〈9〉の「初産」「流れ産」「跡産」「しも産」「のち産」はいずれも出産関係の意味を持つもので、日常語として親しみのある言葉である。また、〈10〉の「小勢」「手勢」「弓^(ゆ)勢」「弓^(ゆみ)勢」「夜^(よ)勢」「大^(おお)勢」「先勢」「引き勢」「助け勢」「伏せ勢」「見せ勢」「押さえ勢」「語らい勢」は、いずれも兵隊を意味するもので、これは古代中国語に由来するものではなく日本で生まれた用法である⁷⁾。日常語としての親しみやすさ、または日本で生まれた用法により、前部の和語要素の影響を受け和語化し、連濁が起こったものと考えられる。これに対して、〈11〉の「手本」「折本」「摺本」は、いずれも二字漢語「写本」「校本」と同じく手本・原本を意味するもので、和語要素が前接しても「正式で立派なもの」という漢語らしい性質は失われていない。そのため、連濁することはなかった。このように、本来連濁は日常的に親しみのある和語に起こるもので、正式・立派なイメージをもつ漢語には起こらないものである。しかし、和語の中にも正式・立派なイメージをもつ語彙があり、漢語の中にも日常的に親しみのある語彙がある。そのために、現代語においても、以下〈12〉のように和語に連濁が起こらないものもあり、〈13〉のように漢語に連濁が起こるものもあるのだろう。

〈12〉ものしり-はかせ [物知り博士]
みぎ-かかと [右踵]

〈13〉 こうや-どうふ [高野豆腐]
かく-ざとう [角砂糖]

一方、語構成の面では、どのような語が和語扱いされ連濁を起こし、どのような語が漢語扱いされ連濁を起こさないのだろうか。呂(2020)は、和語複合語の語構成と漢語複合語の語構成の違いを考察し、漢語複合語は「語の並置」により構成されることが多いと指摘した。具体的には、「語の並置」により構成される以下〈14〉では、前部要素と後部要素の間に語彙的意味を持たない助詞等を入れても、意味に大差が生じない。これに対して、「語の並置」ではない〈15〉では、前部要素と後部要素の間に助詞等を入れるか入れないかで意味のずれが生じる。

〈14〉 にんき-しょうひん
(人気商品 ≡ 人気の商品)
いんない-かんせん
(院内感染 ≡ 院内での感染)

〈15〉 あか-がえる
(赤蛙 ≠ 赤の蛙)
おや-がわり
(親代わり ≠ 親の代わり)

〈14〉の「人気商品」「院内感染」は「人気の商品」「院内での感染」に言い換えても意味に大差は生じない。一方〈15〉の「赤蛙」は、とある特定の種類の蛙のことで、「赤の蛙」は必ずしも「赤蛙」ではなく、「赤蛙」も必ずしも色が「赤」とは限らない。また「親代わり」も、「親に代わって子供の世話をする」という意味であるため、「親の代わり」以上に語彙的意味が付加されている。

以上をヒントにして考えれば、以下〈16〉〈17〉の漢語複合語の連濁を説明することができる。

〈16〉【清】 こいくち-しょうゆ
(濃口醤油 ≡ 濃口の醤油)
かつおぶしり-しょうゆ
(鰹節入り醤油 ≡ 鰹節入りの醤油)
【濁】 からし-じょうゆ
(芥子醤油 ≠ 芥子の醤油)
す-じょうゆ
(酢醤油 ≠ 酢の醤油)

〈17〉【清】 はやとり-しゃしん
(早撮り写真 ≡ 早撮りの写真)
しろくろ-しゃしん
(白黒写真 ≡ 白黒の写真)
【濁】 あお-じゃしん
(青写真 ≠ 青の写真)
かお-じゃしん
(顔写真 ≠ 顔の写真)

〈16〉では、清音形の「濃口醤油」「鰹節入り醤油」は「濃口の醤油」「鰹節入りの醤油」に言い換えることができ、意味の大差も生じない。これに対して、濁音形の「芥子醤油」「酢醤油」は「芥子の醤油」「酢の醤油」に言い換えることができない。また、〈17〉では、清音形の「早撮り写真」「白黒写真」は「早撮りの写真」「白黒の写真」に言い換えても意味に大差が生じない。これに対して、濁音形の「青写真」「顔写真」を「青の写真」「顔の写真」にすると、意味の変化が生じてしまう。「青写真」と「青の写真」は全くの別物であり、「顔写真」ももっぱら証明写真として使用するものを指しており、顔さえ写ればよいというような写真ではない。このように、「濃口醤油」「鰹節入り醤油」「早撮り写真」「白黒写真」は、漢語複合語らしい「語の並置」という語構成によりできた複合語で、連濁が起こらなかった。一方、「芥子醤油」「酢醤油」「青写真」「顔写真」は「語の並置」ではなく、和語複合語のように前部要素が後部要素を修飾してできた複合語である。そのため、後部要素が漢語であっても、和語のように連濁が起こっていると考えられる⁸⁾。

「語の並置」という語構成について、『言語学大辞典術語編』には以下のような記述がある(下線は筆者による)。

並置複合語とは、複合成分おのおの(形態的、意味的、機能的)独立性が保たれ、完全に語彙化していない複合語をさす。並置による複合語ともいう。たとえば、university student「大学生」、post-man「郵便屋」、moon-shine「月光」。日本語では、漢語の複合、たとえば「日本文学」「卒業式」などが並置複合語の例としてあげられよう。並置複合語は、単なる単語連続——たとえば、「白い花」、black bird「黒い鳥」——と完全に語彙化した複合語「酒樽(さかだる)」、black-bird「クロウタドリ」——の中間にある複合語で

ある。いわゆる複合語に対して、並置複合語は、この点で、語の複合語、本来の意味でない複合語とよばれることがある。複合語と単語連続を区別する特徴として、さまざまなものがあげられているが、両者の間は連続的であり、したがって、並置複合語との区別もはっきりしたものではない。

以上からわかるように、「語の並置」という語構成では、前部要素と後部要素が互いに独立性をもち、完全なる複合語には至っていない。そのため、基本的に語の複合の印であると考えられる連濁も起こさないであろう。また、「語の並置」は、漢語複合語に多くみられる語構成であるため、その結果、漢語は基本的に連濁が起こらないという事象につながっているのだと考えられる。ただし、漢語複合語は必ずすべてが「語の並置」という語構成と対応関係を成しているとは限らない。和語複合語にも「語の並置」という語構成があり、漢語複合語にも「語の並置」という語構成でないものがある。これが、〈12〉〈13〉のような例外を生じさせた原因なのではないだろうか。〈12〉では、「物知り博士」「右踵」を「物知りの博士」「右の踵」に言い換えることができるため、語構成上「語の並置」であると考えられ、連濁が起こらない。一方〈13〉では、「高野豆腐」「角砂糖」は「高野の豆腐」「角の砂糖」に言い換えることができないため、「語の並置」による語構成ではないと考えられ、連濁が起こったのであろう。

とはいえ、「語の並置」という語構成でありながら濁音形になるという例外もある。以下〈18〉「～会社」と〈19〉「～不足」は、語構成上「語の並置」かどうかに関係なく、基本的にすべて濁音形をとる。

- 〈18〉 ぼうけい-が^んいしゃ
 (傍系会社 ≡ 傍系の会社)
 いいんかいせ^ち-が^んいしゃ
 (委員会設置会社 ≡ 委員会設置の会社)
 ゆうげん-が^んいしゃ
 (有限会社 ≠ 有限の会社)
 ゆうれい-が^んいしゃ
 (幽霊会社 ≠ 幽霊の会社)

- 〈19〉 すいみん-ぶ^そく
 (睡眠不足 ≡ 睡眠の不足)
 ろうどうりよ^く-ぶ^そく
 (労働力不足 ≡ 労働力の不足)

やく-ぶ^そく
 (役不足 ≠ 役の不足)

IV. 語彙化：連濁の形骸化

以上〈18〉〈19〉には語構成の違いがあるが、後部要素「会社」「不足」の表す意味 company, lack は一定している。これとは対照的に、呂 (2014), 呂 (2015), 山田 (2019) で取り上げられた以下〈20〉「～産」, 〈21〉「～勢」, 〈22〉「～中」は、清音形をとるか濁音形をとるかで、意味の違いがみられる。

- 〈20〉 【清】 し-さん [資産]
 すい-さん [水産]
 【濁】 りゆう-ざん [流産]
 し-ざん [死産]
- 〈21〉 【清】 こく-せい [国勢]
 すい-せい [水勢]
 【濁】 ぐん-ぜい [軍勢]
 ぶ-ぜい [無勢]
- 〈22〉 【清】 すい-ちゅう [水中]
 む-ちゅう [夢中]
 【濁】 きょう-ぢゅう [京中]
 ねん-ぢゅう [年中]

〈20〉では、「～産」が「出産」関係の意味を表すとき濁音形となり、それ以外の意味では清音形となる(佐藤1989)。〈21〉では、「人の集団」を意味するときは濁音形となり、それ以外の意味では清音形となる(呂2015)。〈22〉では、「～中」が「範囲全体」を表すとき濁音形となり、それ以外の意味では清音形となる(森田1984, 鈴木2013ほか)。こうして、清音形の語彙グループと濁音形の語彙グループができ、「～産」にはさらに「日本産」「北海道産」, 「～勢」にはさらに「京都勢」「韓国勢」, 「～中」にはさらに「世界中」「一日中」のような、他の自立語に後接する形式(後述する「接尾辞性字音形態素」)が発達した。「日本産」「北海道産」などは「出産」という意味ではないため、清音形の語彙グループから発生し、現代で「～サン」で使われているのだと考えられる。一方、「京都勢」「韓国勢」などは「人の集団」を、「世界中」「一日中」は「範囲全体」を意味するので、濁音形の語彙グループから発生し、現代で「～ゼイ」「～ヂュ

ウ]で使われているのであろう。

このように、連濁はもともと音韻現象の一つとされているが、同じ意味用法による波及効果で、他の語に影響を及ぼす現象がよく観察される。江口(1994)の指摘する「類推」の一種であると考えられる。「類推」とは、例えば「サイゴク(西国)」のように、もともと清音で使われていたものが、その対義語で濁音の「トウゴク(東国)」の影響で、「サイゴク(西国)」と濁音化する、というような現象のことである。このような「類推」作用により、同じような意味用法をもつ語彙同士がグループを形成し、清濁の使い分けを失くし「接尾辞性字音形態素」として定着する。音韻現象としての連濁の形骸化である。

「接尾辞性字音形態素」とは、用法上、字音接尾辞に準ずる、もしくは字音接尾辞に近似する字音形態素のことである(呂2018b)。「～的」「～化」のような字音接尾辞のほか、「～産」「～勢」のように語彙の意味を残しつつ造語性に富む後接要素も含む。ただし、字音形態素による語彙グループの形成には条件がある。呂(2018b)は、接尾辞性字音形態素が後接できるのは漢語にありうる品詞のみ、つまり名詞・サ変動詞・ナ形容詞のみであると指摘した。基本的に漢語にあり得ないイ形容詞や、独立用法を持たない動詞連用形には、接尾辞性字音形態素は後接することができない。呂(2018a)の指摘する以下〈23〉「～本」の清濁もそうである。

- 〈23〉【清】ふる-ほん(古本)
かし-ほん(貸本)
【濁】えど-ほん(江戸本)
エヴァ-ほん(エヴァ本)

呂(2021)によると、江戸時代には書籍を表す意味で、濁音形「～ボン」の語彙グループが形成した。これにより接尾辞性字音形態素「～ボン」が発生した。書籍の内容や出版年、性質等を表す言葉に後接し、どのような書籍でも表せる便利な用法ができた。〈23〉の「江戸本」「エヴァ本」が濁音形で使われているのも接尾辞性字音形態素「～ボン」によるものであると考えられる。一方、同じく書籍の意味を表していても「古本」「貸本」は清音である。これは「～本」の前接部「古」「貸」が漢語にあり得ないイ形容詞、動詞連用形であるためと考えられる。「～ボン」の語彙グループのものではないと考えられ、「本」ももとの清音形「～ホン」にはじかれたと考えられる。

ともあれ、「類推」が働くようになってから、語の清濁は連濁という音韻現象から離れ、清音形をした語彙か濁音形をした語彙かという語彙レベルの問題へと変わる。一見連濁のように見える現象も、現代では語彙の問題として扱うべきこともあるので、今後の連濁研究において十分に気を付けたい。

V. まとめ

以上で漢字音の連濁に関する諸説を概観してきた。そこから、漢字音の連濁は以下のようにまとめることができる。

中世までは、基本的に鼻音の前接を必要とする「連声濁」が行われていた。漢字音の声調が「連声濁」に影響し、去声字に続く漢字音に連濁が起こりやすかった。一方、和語の前接により連濁する漢字音もみられる。連濁は基本的に和語に起こり、漢語に起こらないとされている。この違いが生じた要因の一つとして、和語複合語と漢語複合語の間で語構成上の違いがみられることが挙げられる。漢語複合語には「語の並置」という種類の語構成がよく見られるが、「語の並置」でない場合、たとえ漢語複合語でも連濁は起こる。ただし、例外のように見える語彙があり、「～会社」「～不足」は、「語の並置」かどうかに関係なく濁音形となる。これらは濁音形のまま接尾辞性字音形態素となったもので、音韻上の「連濁」からかけ離れているといえる。

本稿では普通名詞に使用される漢字音を中心に、これまでの連濁研究を概観してきた。一方、固有名詞に関してはさらなる考察が必要であると考ええる。人名の研究では、「～三郎(さぶろう/ざぶろう)」を考察した原口(2000)、「～太夫(たゆう/だゆう)」を考察した伊東(2008)がある。地名の研究では、「山(さん/ざん)」を考察した鈴木(2012)、城岡(2015)、山田(2018)がある。これらを今後の漢字音の連濁研究の参考としたい。

注

¹⁾ここに挙げる「～会社」「～山」は、もともと語頭にある清音が濁音になっているという意味で「連濁」と仮に称している。一方、佐藤、横沢(2018)が指摘するように「会社」が後部要素として使用されるときすべて濁音形「～がいしゃ」となる。音韻上「連濁」を起こしているというより、江口(1993)が指摘するように、濁音形で語彙化してい

ると考えた方が妥当かもしれない。また「～山」に関しても、岡島（2009）が指摘するように、時代が下るにつれ連濁の性質が変わったこともあり、現代で和語のような「連濁」と扱うべきか、「～会社」と同じく濁音形の語彙化が起きているとみなすべきか、迷うところがある。

- 2) それ以外にも、金田一（1976）は「天下」「身体」などの例を挙げ、古く鼻音の前接により連濁を起こしたのも現代で清音形に替わることがあると指摘した。
- 3) 沼本（1986）は、平安後期以降 [-ŭ] 韻尾字の鼻音性の消失により、連濁が基本的に減少傾向にあるとした。一方、特に固有名詞の類では、山田（2018）が指摘するように、ウ由来の長音の前接による連濁が残存しながら、広範囲にわたり濁音形が発達していく側面も見られる。
- 4) 声調と連濁の関係のほか、語構成の面から考察する江口（1993）もある。和語のような連濁は、古文献における字音語にはすでに見られていたという。
- 5) 小林（1970）、榎木（1988）、江口（1993）、佐々木（1998）による考察からも同様な結論が得られている。
- 6) 近年の研究として太田、玉岡（2017）などがある。
- 7) 現代中国語においても、「勢」字には「兵隊」という意味を持っていない。
- 8) 一方、平野（2021）のように後部要素の「独立性」という考え方もある。「本格焼酎」は連濁しないのに対して「芋焼酎」は連濁する。これは、「芋焼酎」において前部要素「芋」が後部要素「焼酎」の実体を定める必須要素だからである。

参考文献

土井忠生訳（1955）『ロドリゲス日本大文典』三省堂
江口泰生（1993）「漢語連濁の一視点：貞享版『補忘記』における」『国語国文』62-12 京都大学文学部国語学国文学研究室
江口泰生（1994）「連濁と語構造」『岡大國文論稿』22
榎木久薫（1988）「光明真言土沙勸信記における字音の清濁について：連濁に関する考察を中心として」『東洋大学短期大学紀要』19
蜂矢真郷（2017）『古代地名の国語学的研究』和泉書院
原口庄輔（2000）「新「連濁」論の試み」『平成11年度COE形成基礎研究費研究成果報告書4：先端的言

語理論の構築とその多角的実証』
平野尊識（2021）『連濁の規則性をもとめて』ひつじ書房
伊東美津（2008）「連濁について」『九州国際大学教養研究』15-2
亀井孝，河野六郎，千野栄一（1996）『言語学大辞典：第6巻 術語編』三省堂
金田一春彦（1976）「連濁の解」『Sophia linguistica』2
小林芳規（1970）「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」『広島大学文学部紀要：日本・東洋』29-1
窪園晴夫（2004）「音韻構造から見た単純語と合成語の境界」『文法と音声IV』くろしお出版
呂建輝（2014）「漢語連濁の史的変遷：後部要素が「産」の漢語について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37
呂建輝（2015）「漢語連濁の通時的考察と接尾辞化：「～勢」の場合」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』40
呂建輝（2018a）「「～本（ホン）」の連濁について：現代語を中心に」『西日本国語国文学会』5
呂建輝（2018b）「接尾辞性字音形態素の前接要素の語彙制限について」『環太平洋大学研究紀要』13
呂建輝（2020）「連濁しない和語の一側面」『環太平洋大学研究紀要』16
呂建輝（2021）「本（ホン）の連濁における史的変遷」『国語語彙史の研究』40集 和泉書院
森田良行（1984）『基礎日本語3』角川書店
中川芳雄（1966）「連濁・連清（仮称）の系譜」『国語国文』35-6 中央図書出版社
沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』東京堂出版
太田聡，玉岡賀津雄（2017）「連濁とアクセント：普通名詞と無意味語の場合」『連濁の研究』開拓社
岡島昭浩（2009）「漢語から見た語彙史」『シリーズ日本語史2：語彙史』岩波書店
奥村三雄（1952）「字音の連濁について」『国語国文』21-5 中央図書出版社
佐々木勇（1998）「三重県専修寺蔵『三帖和讃』における字音の連濁」『広島大学学校教育学部紀要』2-20
佐藤大和（1989）「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『日本語の音声 音韻』明治書院
佐藤武義，横沢活利（2018）『連濁の総合的研究』勉誠出版

- 城岡啓二 (2015) 「複合語前項の長さの連濁への関与について：固有名詞, 一般語彙, 和語, 漢語」『人文論集：静岡大学人文社会科学部社会学科・言語文化学科研究報告』66-1
- 鈴木豊 (2012) 「字音形態素「サン (山)」を後部成素とする派生語の連濁について」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』12
- 鈴木豊 (2013) 「字音形態素「チュウ (中)」と「ジユウ (中)」の関係について」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』13
- 鈴木豊 (2015) 「字音形態素「ショ (所)」の連濁」『文京学院大学外国語学部紀要』15
- 高山倫明 (2012) 『日本語音韻史の研究』ひつじ書房
- 山田昇平 (2018) 「二字漢語「-山」の連濁とその歴史」『国語語彙史の研究』37集
- 山田昇平 (2019) 「漢語接尾辞「チュウ」「ヂュウ」の歴史：中世末・近世初期における」『訓点語と訓点資料』143輯

付記

本稿は科研費（若手研究，課題番号19K13207）による研究成果の一部である。